

## 翻訳：マルクス・エンゲルス新全集第二部第8巻序文

齊藤彰一 訳<sup>1)</sup>

この巻は、1883年ハンプルクのオットー・マイスナー出版社からフリードリヒ・エンゲルスの序文を付されて発行された、カール・マルクスの主著『資本論 経済学批判』第3版（改訂版）を収録している。この巻でははじめて、エンゲルスの「『資本論』第1巻のための諸追加、諸変更」（おそらく1873年の11月終わりから12月初めまで）と、マルクスの「『資本論』第1巻ドイツ語第2版の諸変更のための一覧表」（1877年9月から10月19日まで）が公表されている。付録として、マルクスの手の入ったヨハン・モスト著『資本と労働』第2版が掲載されている。これはマルクス自身によって編集された大衆向けのダイジェスト版であり、1876年ヒュミニッツア印刷同業組合から出版されている。

すでに1881年、『資本論』第1巻・ドイツ語第2版が絶え間のない需要によってすでにほとんど品切れ状態にあることから、『資本論』第1巻第3版を準備することが必要となった（S.846 参照）。1883年3月29日から4月2日にかけてコペンハーゲンで非合法的に開催されたドイツ社会主義労働者党（SAPP）の党大会が、マルクスの諸著作の学習の重要性を指摘したのち、ドイツ語第3版は一斉に刊行された。これとの関連でマルクス、エンゲルスの既刊の諸著作が新しく刊行された。『共産党宣言』や『空想から科学への社会主義の発展』その他である。ドイツ語第2版発行以降、ドイツの経済発展の時代は大不況の時代という特徴がある。19世紀70年代初めのいわゆる泡沫会社乱立時代と世界経済恐慌のあとから続いたものである。自由競争的な資本主義は完全なる発展をみたが、それは深刻な社会的変動をともなった。ブルジョアジーは完全な支配を欲し、プロレタリアは成長して全社会的な進歩の担い手となった。激しく膨張する生産諸力、それらは特に電化、化学化そして機械化——伸長しつつある自然科学・技術科学を利用しつつ——によって特徴づけられるのだが、このことはすべての発達した資本主義国における資本の集積と集中を引き起こした。この発展は労働者たちの社会的状態の一定の悪化をともなった。賃金引下げ、労働時間の延長、物価上昇という事態、それに失業も加わる。1880年代はじめのドイツ社会民主主義の闘争は、1878年10月21日のビスマルクの社会主義者鎮圧法の諸制限のもとで生じた。こうした政治的・経済的な事情を背景として、組織的な労働者階級は次のような課題に直面した。すなわち搾取諸階級に対する経済的、政治的および理論的な闘争を指導するということ、これである。社会主義政党の活動をはっきりと制限していた社会主義者鎮圧法の施行されたのち数年後、1883年のコペンハーゲンでの党大会は、党の統一のための大転換、マルクス主義をもっと強固に習得し精通し、より創造的に適用することへの大転換が公表された。この過程において『資本論』第1巻は重要な地位を占めることとなった。

---

1) 岩手大学人文社会科学部准教授

1864年に国際的労働者協会が発足し、1867年に『資本論』の第1巻が出版されたことは、科学的社会主義と労働運動とが合体するという一つの新しい段階が始まったことを意味する(MEGA II/5 序文参照)。1869年にアイゼナハで社会民主主義労働者党が発足したことは、そのことのわかりやすい表れであった。1870年代のはじめ、労働者運動は、「その発展の幅のひろがる時代、個々の民族国家を基盤として大衆的な社会主義的な労働者の党が発展する時代」(W.I.レーニン『カール・マルクス』レーニン全集第21巻、ベルリン、1984年、S.38)に突入した。労働運動の高まりは、パリ・コミュンによって長きにわたって刺激を得ていた。パリ・コミュンの出来事とともに「資本家階級とその国家との労働者階級の闘争は、新しい局面に入りました。」それによって「世界史的に重要なひとつの新しい出発点が獲得されたのです。」(1871年4月17日付クーゲルマン宛マルクス書簡)この新しい状況に特徴的なことは、ドイツの社会民主主義の発展が国際的労働運動の方向に向けて重点を移したということである。

その時期、『資本論』の理論は、「ますますドイツの社会主義者すべての共同財産へとになっていった(フリ-ドリヒ・エンゲルス『ドイツにおける社会主義』、『ノイエ・ツァイト』、シュトゥットガルト、第10号、1891-1892年、第1巻、S.581)。」したがって『資本論』のおかげで、ドイツ労働運動は統合の必要性は生じた。社会民主労働党(ADAV)と、全ドイツ労働者協会(ADAV)が、1975年5月のゴータにおける党大会にて統合したことは、労働者階級の闘争における一つの重要な成果であった。

マルクスとエンゲルスは両政党の統一が実現したことを評価した。しかし同時に彼らは、社会民主主義の指導者たちに対して綱領草案への批判的な見解を表明した。『資本論』にのっとってマルクスは、彼の「ドイツ労働者党綱領評注」において資本主義的搾取と生産・分配諸関係の本質を説明し、同時に俗流社会主義的な分配構想を分析した。マルクスは資本主義的蓄積の歴史的傾向から共産主義的社会構成体の発生と発展のための結論を導き出した。この「評注」において説明されている諸認識は科学的社会主義の内容を豊かなものとした(MEGA I/25, S.18参照)。

ゴータでの統一党大会ののち、マルクス主義の諸主要著作の諸理念の宣伝活動が強化された。これに加えて初期社会民主主義の重版もまた貢献した。その中には、『資本論』の諸認識に手を入れているものもあった。たとえばアウグスト・ベーベルの『我々の目的』やヴィルヘルム・リーブクネヒトの『根本的かつ基礎的な問題について』といったものがある。『フォルクスシュタット』のち『フォアヴェルツ』では1872年から1877年までに『資本論』の重要な理論的・政治的諸問題にかんする一連の論文が掲載された。マルクスが、1875/1876年にモストのパンフレット『資本と労働』をすっかり改訂し、それによってこの大衆向けの著作に『資本論』の学問的に正しい入門の性格を与えたことも重要であった。このテキストは、1876年に出版されている(S.733-787参照)。さらにヴィルヘルム・フラッケ、ヨーゼフ・ディーツゲンそしてカール・アウグスト・シュラムらの諸著作が公刊される。それらの内容は『資本論』に立脚して資本と労働との関係を説明するものである。マルクスの経済理論はしばしば、まだ不十分にしか理解されていないこともあったが、総じて『資本論』は社会主義者鎮圧法以前から労働者階級の政治経済学の科学的叙述と認められていた。1870年代におけるプロリタリア階級闘争の新たな諸条件のもと、労働者階級の科学的な世界観としてのマルクス主義のさらなる彫琢はひとつの客観的な必要条件となった。労働運動の目的としての社会主義にかんする、科学的に論理立った観念を説明することもこれに加わった。同時にマルクス主義は、ブルジョア・イデオログからの増大しつつある攻撃や党内の小ブルジョアの見解から守らなければならなかった。このような客観的要求に対して、エンゲルスは1876年から1878年、『反デューリング

論』を仕上げることをもって応じるようになった。そのさいマルクスから多大の援助があった。エンゲルスは、マルクス主義的世界観の内的で理論的な連関を包括的に基礎づけた。彼は理論および方法としての弁証法的唯物論を説明した。政治経済学の整理、とりわけ資本主義の生産様式の経済的運動法則およびその歴史的発展傾向を説明することは決定的に重要なことであった。エンゲルスは社会主義革命の理論を基礎づけ、そして未来社会の諸特徴を述べ伝えた(MEGA I/27, S.15参照)。『反デューリング論』は『共産党宣言』や『資本論』と並んで、マルクス主義の最重要の著作のひとつとなった。同時に『反デューリング論』はマルクスの理論へのより徹底した研究への関心を呼び覚ました。

1870年代および80年代において、国際的労働運動においてもまた『資本論』の普及および影響は大きなものとなった。1872年にはロシアでその最初の翻訳が世に出て、ゲルマン・アレクサンドロヴィッチ・ロパチン、ニコライ・フランツェヴィッチ・ダニエルソンおよびニコライ・ニコライエヴィッチ・リュバヴィンにより仕上げられた。マルクスはこの版をとて高く評価した(1872年5月28日付、ニコライ・フランツェヴィッチ・ダニエルソン宛マルクス書簡, MEGA II/6, S.704)。のちにマルクスは『資本論』は他の地域のどこよりもロシアでより多く読まれ、より知られていると認めるようになる(1880年11月5日付、フリードリヒ・アドルフ・ゾルゲ宛マルクス書簡)。『資本論』は1883年、ロシアで最初のマルクス主義者の組織「労働の解放」が形成されるための地盤を与えた。その組織はマルクス主義を強力に宣伝することになる。

フランスでは1872年から1875年までドイツ語第2版を基底原稿としてジョゼフ・ロワが携わった翻訳が出版された。それはマルクスがまかせたものであった。マルクスはこのフランス語版を、その内容的なテキストの発展を取り上げて、それが独自の科学的価値をもつものであると特徴を述べた(MEGA II/7, S.690参照)。この『資本論』のフランス語版は、重要な役割を演じることになる。1879年、マルセイユにおける第3回労働者会議で、フランスでの新しい労働運動の発展がより高い段階を迎えたのだ。

アメリカ合衆国では、1876年にアメリカ社会主義労働者党の設立が実現したのち、『資本論』への関心が高まり、そしてとりわけゾルゲがアメリカ版の公刊に努力した。残念ながら1877年に企画されたカール・ダニエル・アドルフ・ドゥエによる第1巻の翻訳は実現しなかった(S. 805-807参照)。オットー・ヴァイデマイヤーによって1878年に手に入れられたモストの著作の第2版英語版の翻訳がはっきり示したことは、『資本論』の理念は、アメリカにおいてもマルクス主義の宣伝、政治的扇動のために採用しようということだった。

『資本論』第1巻のドイツ語第3版は、「増補版」として公刊された。エンゲルスは序文で強調している。マルクスが「本文の大きな部分を書き改め、幾多の理論的な点をいっそう明確に述べ、新しい点をつけ加え、最近にいたるまでの歴史的および統計的資料を補足するつもり」であった。「彼の健康状態と、第二巻を最終的な編集にまでこぎつけようとする熱望とのために、彼はこの企てを断念した。最も必要のところだけが変えられ、その間に刊行されたフランス語版にすでに含まれていた諸追補だけが付け加えられた」と(S.57)。エンゲルスはマルクス死後の編集作業のさい、マルクスの自筆の指示が書き込まれているドイツ語第2版とフランス語版のサンプルをよりどころとすることができた。エンゲルスは、「著者自身であれば変更したであろうと」(S.58)確実に彼が知っていない言葉については、一語も変更しなかった。ドイツ語第3版における内容的なテキスト諸変更は、だいたいにおいてフランス語版にもとづいている。最初のふたつの篇におけるいくつかのわずかなテキスト変更は、ドイツ語第2版の

サンプルから受け継がれている。

ドイツ語第3版のテキストを作り上げる難所は、資本の蓄積過程にかんする篇にある。これまでのドイツ語版ではこの部分はまだ改訂されてこなかったとエンゲルスは強調している(S.57参照)。同様にマルクスが第2版から始めていた諸概念の明確化は続行されていた。それに加えて意味の変更が行われていた。例えば「交換価値 Tauschwert」と「価値 Wert」の意味、および「工学上の technologisch」と「工学の technisch」という意味の諸変化といったものである。

フランス語版から引き継がれた諸変更は、ブルジョア社会の経済的運動法則の叙述のさらなる改善に貢献している。このことによってドイツ語第3版は、マルクスの思い描いていた像に従うものとなった。

エンゲルスはドイツ語第3版では、「『資本論』第1巻・ドイツ語第2版の諸変更のための一覧表 Verzeichnissen zur Veränderungen der 2. deutschen Auflage des ersten Bandes des "Kapitals"」でマルクスがまとめていたもののうち、すべての指示を考慮にいたったわけではなかった。

エンゲルスはこのことにつき、「資本論第1巻アメリカ版への編集指図書 Verzeichnis der Veränderungen für eine amerikanische Ausgabe des ersten Bandes des "Kapitals"」の傍注で意見を述べている(S.31/32.)。マルクスはこの一覧表で、フランス語版からのいくつかの新しい構成の個所を書き留めている。しかしドイツ語第4版の構成は第2版のそれに従っている。フランス語版で変更された文章のうちすべてが新しい版へと移ったわけではない。

ドイツ語第2版の「変更一覧表」には、フランス語版で引き継がれたテキストの発展が考慮されるよう、マルクスが1877年ドイツ語第2版およびフランス語版に取り組んだときの熱意が反映されている。

ドイツ語第3版はエンゲルスによる一連の注解があり、それらは彼自身によって編集者(D.H.: Der Herausgeber)と注記されている。そのなかでエンゲルスは生産力と自然科学の発展のいくつかの側面を取り扱った。そこで彼は『自然の弁証法』からの自身の研究結果を採り入れている。そのことは、分子理論(S.309参照)の発展と蒸気機関(S.350参照)の馬力の数学的計算についての補足が示している(MEGA I/26, S.180-181とS.212-218参照)。エンゲルスはほかに、彼の著書『マルク』ですでに書いていた、14世紀から16世紀までのヘリゲンにおけるドイツ自由農民の発展にかんする内容を利用して、ルーマニア地方の農奴制にかんするマルクスの叙述を描き出した。エンゲルスはさらに文体上の修正をおこなった。彼は外国語をとりわけ英語風に翻訳し、印刷の間違いを取り除いた。これら必要な修正をエンゲルスはおそらくすでに1873年の終わりに注記し、そのことをマルクスに書き送っている(S. 3 参照)。

短い序文のなかでエンゲルスは、ドイツ語第3版におけるテキスト諸変更に言及した。さらに彼は、ブルジョア経済学者たちが論争を仕掛けてきたマルクスの引用方法にも説明を加えた。彼は強調している。「『資本論』における引用は、「経済学」の発展過程のなかで生まれてくる経済思想が、いつ、だれによって、はじめて明確に語られているかを確定するだけのものである」と(S.58とS.61)。そしてさらに彼は書いています。それによって引用は、「経済学の歴史」からとってきたテキストの「一連の注釈」を表現していると。この意味でマルクスはすでにフランス語版にいくつかの追補を行っており、それはドイツ語第3版にも含まれている。このことは何よりも、ジョン・スチュアート・ミル、ピエール・ジョゼフ・ブルドンそしてトーマス・ロバート・マルサスの広範な経済学的見解に関するものであったが、しかしまた経済理論の歴史における重農学派の業績とりわけフランソワ・ケネーの『経済表』を強調するもので



もあった。

マルクスは引用を通じて、「いくつかのより重要な経済理論」(S.61)の進歩を証明したいと思っていたので、彼にはドイツの経済学を引き合いに出す理由はほとんどなかった。カール・ハインリヒ・ロートヴェルトゥスは例外であり、マルクスは『剰余価値学説史』(MEGA II /3.3. S.673-813参照)での初期の徹底的な検討にもとづいて、ロートベルトゥスが地代理論の誤りにも関わらず資本主義的生産の本質を見抜いていた」(S.503)と述べている。エンゲルスはドイツ語第3版でこの肯定的な見解を相対化することを余儀なくされた。というのも歴史学派が70年代終わりにマルクス主義との戦いにおいて、ロートベルトゥス死後、彼を「経済学的社会主義のリカードゥ」(アドルフ・ワグナー「序文」[ロートベルトゥス・ヤゲツォー宛フェルディナント・ラサール宛書簡、ベルリン、1878年]に関して)「最初の科学的社会主義者たち」と表現しようとしていたからである。これについては、マルクスは賛同しなかったであろう。このことについてはロートベルトゥスの遺稿や書簡等が公開されていた。そこではマルクスがその剰余価値理論をロートベルトゥスに負っているというのである。したがってこの見解を駁することが必要になったのである。エンゲルスは第3版で、公表されたルト・マイヤー宛のロートベルトゥス書簡は上記のような称賛を大幅に制限するものと補足した。アウグスト・ベーベル宛の書簡のなかでエンゲルスは次のように指摘している。ロートベルトゥスは価値法則の土台のうえでの資本と労働との交換を説明することができていないため、剰余価値の理解へ向かってはいるが到達しているとは言えない、と。エンゲルスは『空想から科学への社会主義の発展』の機会を利用して、マルクスの剰余価値理論の基礎は労働者階級の精神的武器であると詳しく述べている。エンゲルスは『資本論』第1巻ドイツ語第3版(1885年)だけでなく、『資本論』第2巻序文でも、『哲学の貧困』の序文でも、歴史学派のロートベルトゥス礼賛に対して決然と踵を返した。

ドイツ語第3版の表題ページにある「増補版」という表示は、本質的にすべての篇のテキスト変更と関連しており、それらは経済理論のいくつかの諸概念と文章を明確に表現し規定することを意味していた。内容的な変更は特に第7篇に偏在しているが、他の部分でもまた理論的および経験的な内容の文章が変更されている。

第1篇「商品と貨幣」ではわずかな変更しか行われていない。それらは第1章の始めの部分におけるいくつかの補足にもとづいており、おそらくマルクスが1877年の夏すでにドイツ語第2版から計画していたものと思われる。この時期マルクスは、ブルジョア的・小ブルジョア的世界観、とくにオイゲン・デューリング、イラリオン・イグナツェヴィッチ・カウフマンおよびカール・クニースなどとの議論に携わっていた(1877年7月25日付エンゲルス宛マルクス書簡、1877年7月31日付マルクス宛エンゲルス書簡、1877年8月1日付エンゲルス宛マルクス書簡、参照)。のちにエンゲルスはこれら諸変更について書いている。『『資本論』第3版のなかの交換価値や価値にかんする新しい部分の出所はマルクス自身の自筆の補遺だ。残念ながらそれらはほんのすこししかない。これらは、重い病気を冒して書き上げられたもので、マルクスは長いこと正しい表現を求めているいろいろ訂正をくわえていたのだ。』(1891年12月27日付カール・カウツキー宛エンゲルス書簡)

マルクスは、商品の分析のはじめに、いくつかの文体上の諸変更によって「使用価値」という概念の導入を改善することが可能であると考えていた。その場合大切なことは、その使用対象が人間的欲求を満たすことのできるような、そうした諸属性であった。(異文61.1-2, 63.13-16, 64.25-26参照)。これら計画されていた諸変更は、もしかするとクニースの著書『貨幣と信

用』第1巻へ取り組んだことに原因があるのかもしれない。マルクスが所蔵していたこの本のサンプル、とりわけ、クニースがマルクスの価値理論にふれたその第1篇「貨幣」には、多くの下線が引かれている（カール・クニース『貨幣と信用』第1篇、ベルリン、1873年、S.117-125）。マルクスはそこからエンゲルスに、クニースの価値理論の中核部分を言葉で表現した引用部分をエンゲルスに伝えている。「異種の使用価値の等置は、ただそれらを一つの共通な使用価値物に還元することによってのみ、説明されうる。」（1877年7月25日付エンゲルス宛マルクス書簡）クニースはこう書くことによってマルクス価値理論を使用価値論と対置させているわけである。したがって明らかに言えることは、ドイツ語第2版自用本におけるマルクスの諸定式は、価値規定の客観的性質を強調するために、価値実体から使用価値の諸性質を明確に切り離すことに向けられていたことだった。

この問題は、ドイツ語第3版の別の個所でも現れる。諸使用価値の交換比率が問題となるのである。「ある特定の商品、たとえば1クォーターの小麦は、x量の靴墨、y量の絹、z量の金などと、要するにきわめてさまざまな比率で他の諸商品と交換される。だから、小麦は、ただ一つの交換価値をもっているのではなく、いろいろな交換価値をもっている。しかし、x量の靴墨もy量の絹もz量の金なども、どれも1クォーターの小麦の交換価値であるから、x量の靴墨、y量の絹、z量の金などは、互いに置き換えうる、または互いに等しい大きさの諸交換価値でなければならない。それゆえ、こういうことになる。第一に、同じ商品の妥当な諸交換価値は一つの等しいものを表現する。しかし、第二に、交換価値は、一般にただ、それとは区別されうるある内実の表現様式、「現象形態」でしかありえない。」（S.69）マルクスはドイツ語第2版で、交換価値が「これらさまざまな表現諸様式とは区別されうる一つの内実を持たなければ」ならないと定式化している（MEGA II/ 6. S.71）。

マルクスが価値論の基礎を扱った第1篇の諸変更は、価値と使用価値、および価値と交換価値にかんする諸関係をより正確に書くことと関連している。この改訂は明らかに、彼の価値表現に対するブルジョア的な反論に彼が関心をもったことに触発されたものであり、歪曲を打ち消して誤解を排除するために表現をより正確にすることが必要であることを彼に示した。何よりも、客観的な価値理論は、ブルジョワ・小ブルジョア経済学者の主観的な価値解釈とは区別されなければならなかったのである。

フランス語版でより簡潔に定式化されたひとつのテキスト部分を引き継ぐために、マルクスは第2篇「貨幣の資本への転化」でいくつかの変更を、ドイツ語第2版の自用本に書き留めていた。マルクスが単純な商品流通における価値の形態転化をより鮮やかに説明したかったことは、ドイツ語第2版の自用本（異文175.11-14参照）と2枚の紙の挿入物（図S.173/174）が証明している。マルクスは、商品の流通において、その価値は、「最初は彼の商品の形態で、次に転化される貨幣、最後にこの貨幣が再転化される商品」（S.175）と形は変わりつつ、商品の所有者の手中では同一のままであると規定した。対象化された社会的労働の形態転化の叙述を通じて、研究対象は交換価値ではなく、商品-貨幣-商品という形態転化における価値の運動であることがより強く強調された。流通におけるこの位置の取り換えは、価値量の変化をなんらもたらさない。

剰余価値の生産の本質が明らかにされた膨大な第3篇「絶対的剰余価値の生産」は、マルクスにとっては内容と形式の点でかなり成熟しているように見えた。なぜなら彼はごくわずかな変更しか予定していなかったからである（S.7/8参照）。ドイツ語第2版の1ページで指示された3つの変更は、労働過程と価値増殖過程の一時間労働の実体の規定に関するものであった（MEGA II/ 6. S.203参照）。剰余価値の生産において、労働時間とは、時間的な「生命力の

支出」(S.202)が消費した社会的労働の指標となり、労働支出として価値形成過程に入ってゆくことを意味する。さらに、マルクスは、価値形成過程における原材料と生産物は、実際の労働過程の観点とは異なる見方をする必要があるとここで付け加えた。原材料は一定の量の労働を吸収し、糸に転化してしまうからである。「労働力が紡績の形で支出され、それに付け加えられるのだから」(S.203)。このテキストの変更でより明らかになったことは、労働過程では原材料に質的な変化が起きること、そしてひとつの生産物は具体的労働によって生み出されるということであった。価値増殖過程の観点から見ると、生産物に労働が入りこむ場合に重要なのは抽象的労働である。これに関連して具体的労働に、より正確な名前が付けられ、マルクスは「実際の労働」を「有用労働」に(異文208. 4)、「労働力が費やされた」を「労働が有用に費やされた」に変更した(異文208. 9-10)。

第4篇「相対的剰余価値の生産」における最も重要な変更は、第13章「機械と大工業」に関連している。この章では、マルクスは生産力の発展傾向を詳細に分析した。ドイツ語第2版で彼は、ブルジョア社会における工場システムの大きな可能性を強調したが、しかしまた共産主義社会における機械の使用可能性の「まったく違った余地」をも指摘していた。マルクスは各国の工場法を徹底的に調査し、ドイツ語第3版を作成するときに最新の発展を考慮に入れることを意図していた。これはまた、マルクスに代わってエンゲルスがエドゥアルド・ベルンシュタイン宛に、スイスとドイツからの最新の工場法を送るように依頼したという要請からも明らかであった(1882年11月4日付エドゥアルド・ベルンシュタイン宛エンゲルス書簡参照)。どうやらマルクスは、労働者階級の権利をめぐる闘争においてドイツの社会民主主義を包括的に支援するために、ビスマルクの社会立法の原因と影響を分析することが重要であると思っていたようである。

マルクスはフランス語版で、特に「労働者と機械との闘争」と「補償説」についての部分に変更を加えた。彼の指示によると、これはドイツ語第3版にも採り入れられるべきとのことであった。歴史的な例をとって、イギリスの綿工業の技術開発と1861年から1865年までの南北戦争の関係を説明した。挿入された統計データ(S.423/424参照)は、米国からの綿輸入の減少がこの産業部門の労働者数を減らし、同時に綿加工機械のさらなる開発が行われたことを示している。したがって、南北戦争の終結後、集積の過程が確立され、世界市場でのイギリスの競争力が確保された。マルクスは、労働者階級の悲惨さが機械の進歩とともにますます大きな規模で拡大したという証拠を提示した。

マルクスは、ドイツ語第3版で、ジェームズ・ミル、ジョン・ラムジー・マカロックなどの一連のブルジョア経済学者が主張する補償説に対抗するために議論を拡大した。彼らは「労働者たちを駆逐するすべての機械が、いつの場合も同時にまた必然的に、まったく同じ労働者たちを就業させるのに十分な資本を遊離させる」(S.426)と主張している。マルクスは強調する(異文, 427.42-428.10)。「機械は、それ自体、労働者の「遊離」に責任がない」(S.429参照)と。資本家にとって「機械の資本主義的利用以外の利用は・・・ありえないことなのである」(S.430)。機械の導入により一部の部門の労働者数が減少した場合、それは他の部門の雇用労働者数の増加につながることはあり得る。「しかし、この作用はいわゆる補償説とは何も共通するものをもたない」(同上)。機械によって生産が拡大された場合、資本は元の量の労働力と交換されない。つまり可変資本は不変資本に転化する。マルクスは、いずれにせよ、機械によって生産が行われる場合、機械の製造に従事している労働者の数は、その使用によって駆逐される労働者の数よりも少ないということを証明した。なぜなら駆逐された労働者の賃金総額が機械の形になるからだ。すなわち機械の製造に必要な生産手段の価値、機械工の賃金総額と

剰余価値である。マルクスは、ブルジョア経済学者が補償として労働者に与えられるとする自由裁量権が「最もひどい災厄」として彼らを見舞うことを示した（S.429）。ここで彼は第7篇で取り扱われる資本主義蓄積の一般的かつ絶対的な法則にすでに言及している。同時に、ドイツ語第3版では、マルクスは、資本主義的条件下での機械の使用を悪としてさしものにすることは社会の進歩に反するというブルジョア経済学者たちの主張に明確に反対した（S.430参照）。

第5篇「絶対的および相対的剰余価値の生産」、特に第14章「絶対的および相対的剰余価値」では、フランス語版のいくつかの文章を追加することによって、より詳細になり明確なものとなった。これには全体労働者の概念にかんする追加的な文章も含まれている。ドイツ語第2版ではマルクスは——労働過程における頭の労働と手の労働がもともと統一的なものだったことから出発して——それらの起源について定式化している。のちにそれらは分離し「敵対的に対立する事態になる。生産物は、一般に、個人的生産者の直接的生産物から一つの全体労働者の、すなわち一つの結合された労働人員の共同生産物に転化する」（異文484.1-2参照）と。生産物は「社会的な、全体労働者の共同生産物に」（S.484）転化するとマルクスは付け加えた。

全体労働者の概念は新しいものではなかったが、その概念は以前の版と同様に、分業の観点から、いまや生産の結果に、資本主義の生産物に、生産的労働の規定にも適用された。すなわち「生産的に労働するためには、みずから手を下すことはもはや必要ではない。全体労働者の機関となる……ことで十分である」（S.484）。この概念は、この文章によって定義が拡張されている。生産力の発達と機械の製造は、生産的労働の性格の拡大をもたらし、個々の労働者は社会的労働によって追放される。したがって、全体労働者は、進展しゆく社会的分業の結果である。マルクスは以前の版で、「生産的労働者の概念」は同時に狭くなる、というのは「一般的に労働する」だけでは十分でなく剰余価値も生産しなければならないからであると注意を喚起していた。この追加によってマルクスは、全体労働者の概念の社会的内容を際立たせることができたのである。

マルクスは絶対的および相対的な剰余価値の相互作用を以前よりも簡潔に特徴づけた。絶対的剰余価値の生産は「資本主義制度の一般的基礎」（S.485）をなすが、相対的剰余価値の生産は「労働の技術的諸過程とその社会的諸編成に変革をもたらす」（同上）。ドイツ語第2版でマルクスは「商品生産の一般的諸条件」を剰余価値の分析のための前提とした（異文484.35から485.11）。これに対して彼はドイツ語第3版で、生産的労働者の概念は「特殊に社会的な、歴史的に成立した生産関係」を含んでいると述べている（S.484）。マルクスはそれによって、剰余価値を生み出すための前提として労働の社会的性格を強調した。

ドイツ語第3版では、剰余価値の二つの形態についての説明の最後に、フランス版から価値の起源についてのミルの説明についての理論的・歴史的付論が追加された（S.490-492参照）。ミルの著作『経済学原理』は1868年に新版で出版されたが、イギリスだけで読まれただけではなかった。ドイツでは、ミルの見解は主に講壇社会主義者たちによって繰り返された（S.51参照）。したがって、このミルの新版がフランス版でのミル批判につながったのだと推測することができる。エンゲルスは、『資本論』のフランス語訳で「ミルについての覚え書」を特に強調した。（1873年12月5日付マルクス宛エンゲルス書簡）。マルクスはまた、この一節の重要性を何度か指摘し（1875年2月11日付ピョートル・ラヴリヴィッチ宛マルクス書簡を参照）、1878年11月28日のダニエルソンへの手紙の中で、別のロシア版に含めることを推奨した（異文491. 33-39 参照）。マルクスは最初にリカードウ派の業績に言及した。リカードウ派は、剰余



価値が発生するためには労働生産力が重要であることを「声高く宣言」している (S.490)。しかし、彼はリカード派が剰余価値の起源を理解していなかったと限定的に結論しなければならなかった。次にマルクスはブルジョア経済学の没落の過程を示すことに関心を持っていた。デイビッド・リカード以降半世紀のち、ミルが登場し、食物、衣類、原材料、労働手段が生産に必要な時間よりも長時間持続するという事実から「利潤」という概念が発生するとし (S.491を参照)、賃金総額を超える部分から利潤が発生するとした。ミルは、労働者が資本家に彼の労働を前貸しすると考え、利潤は前貸し資本全対に対して計算されなければならないという経済的関係を無視した。したがって、ミルは「最初にリカードを最初に浅薄化した連中」に逆戻りした。

第15章「労働力の価格と剰余価値との量的変動」ではマルクスは剰余価値率と利潤率との関係に踏み込んでいる。一方で彼はドイツ語第2版で第3部への注意を喚起している (MEGA II/6, S.488)。そこでは彼は「同じ剰余価値率がさまざまな利潤率であると表現され、また様々な剰余価値率がある諸条件のもとでは同じ利潤率として表現されうる」 (S.497) ことを証明することになる。他方で彼はドイツ語第3版で一つの例をだして利潤率と剰余価値率との違いを説明している (異文496.31-36 497. 1- 4 参照)。利潤率は総資本に対する剰余価値の比率によって決定されるのに対し、剰余価値率は可変資本に対する剰余価値の比率によってのみ決定されるため、「利潤率は、剰余価値率にまったく影響を与えない状況に依存する可能性がある」ことは明らかである (S.497)。この明確化は、マルクスの分析を彼の先行者の理論、すなわち「剰余価値そのもの決して研究しなかった」リカードから区別し、ドイツ語第3版でマルクスは次のように追加した。リカードは「労働日の長さや強度の変化を知らず、そのため彼にあっては、労働の生産力だけが唯一の可変要素となっている」 (S.496) と。マルクスの歴史的功績は、剰余価値と剰余価値率をはじめて表現したところにある。

第6篇「労賃」のなかでは第20章「労賃の国民的相違」がマルクスの指示に沿ってフランス語版から拡張され追加された (S.11参照)。マルクスは世界市場における価値法則の修正に、とりわけより明確に踏み込んでいる。彼は社会的必要労働が価値尺度を規定することから出発し、中位の労働強度がさまざまな国では異なっていると指摘する。労働強度がより高い国では、労働強度のより低い国でよりも、同じ時間で貨幣で表示される価値がより多く生産される。したがってマルクスによれば、その国民的諸平均は「段階状をなし、その度量単位は世界的労働の平均単位である」 (S.528)。資本主義的生産の発展段階の違いは、さまざまな国においては同じ労働時間でさまざまな商品量が生産されることに結果する。この発展の違いによって「不平等な国際的価値」 (同上) が生まれ、それらは世界市場ではさまざまな価格として表現される。この諸関係がもろもろの国民的労賃に対して相応の影響を及ぼすことになる。「貨幣の相対的価値は、資本主義的生産のより発達した国民のもとでは、発展の低い国民のもとでもより小さいであろう。したがって、名目的労賃、すなわち貨幣で表現された労働力の等価物も、やはり第一の国民のもとでのほうが、第二の国民のもとでもより、高いであろう」 (同上)。マルクスはこう述べることによって、価値規定を直接引き継ぎながら、価値法則がいかにして世界市場で修正されるかについて明確に説明したのだ。第3版の脚注で彼は、さまざまな生産部門における生産力にたいして影響を及ぼす諸状況が、他の個所つまり第3部 (MEGA II/4.2 参照) で、より詳しく研究されるだろうと強調している。

第7篇「資本の蓄積過程」では、ドイツ語第3版では第2版と比べて本質的なテキスト変更が示されている。「第2版の諸変更の一覧表」から判明することは、マルクスがフランス語版のためにこの篇を大幅に修正したこと、そして決定的な変更がさらなるドイツ語版で考慮に入

れられるはずだったことである。エンゲルスが強調したように、ドイツ語初版での蓄積の叙述には、「いくつかの重要な契機がほのめかされただけのあちこちの欠落箇所が含まれていた」(S.57)。マルクスはまた、フランス語版の第7篇の文章の発展の重要性を繰り返し指摘していた(1875年2月11日付ピョートル・ラヴロヴィッチ宛マルクス書簡, 1876年4月4日付フリードリッヒ・アドルフ・ゾルゲ宛マルクス書簡)。

蓄積理論はマルクス経済学の中なかでは、価値・剰余価値理論と同じく重要なものである。それは資本の生産と、『資本論』第2巻の研究対象となる社会的総資本の再生産との間の関係を確立するものである。蓄積の叙述のための出発点は商品の流通である。「これら商品売り、それらの価値を貨幣に実現し、この貨幣をあらためて資本に転化し、こういったことを絶えず新たに繰り返すことが必要である。いつも同じ継起的な諸局面を通過するこの循環は、資本の流通を形成する」(S.532)。蓄積過程の分析のための重要な前提は『資本論』第1巻にあるのだから、第3版では次のように付け加えられる。「資本がその流過程を正常に通過する」ことである(同上)。それに応じてマルクスは「蓄積過程の単純な基本形態」を考察し、「蓄積過程の機構の内的作用を覆い隠すいっさいの現象」を度外視する(S.533)。

単純再生産を取り扱う第21章では、フランス語版からのいくつかの文章が引き継がれ、それらの文章はテキストの変更(異文538. 9-20, 538. 30-32および539. 1-19 参照)、しかしまた明確化にもつながった。マルクスは資本主義的生産過程における労働生産物の労働そのものからの分離を引き合いに出した。単純再生産の結果としてこの分離はつねに新しく生産される。つまり資本主義的生産関係はつねに更新される。「一方には資本家がおり他方では賃労働者」がいる(S.545)。労働者の状態は再生産過程では変化することはない。なぜなら労働者は絶えずこの過程から「そこに入ったままの姿で一富の人的源泉ではあるがこの富を自分のために実現するあらゆる手段を奪われたものとして一出てくる」(S.537)からである。マルクスはそれとともに、労働者自身はみずからの労働の成果によって得をすることはないと強調する。したがってマルクスはドイツ語第3版で「労働者の消費」の「二種類の仕方」(異文538. 9-20 参照)を強調した。この2種類の消費は個人的消費と生産的消費であり、「まったく」(第2版では「本質的に」)異なる(同上)。マルクスは物質的な富の変化の領域を際立たせ、それを「資本家のための奢侈品」(S.537)とは別のものとして拡大した。

第22章「剰余価値の資本への転化」では、拡大された規模での資本主義的生産過程に関する最初のほぼすべての個所に、新しい表現が用いられることになった(異文545.25から549. 7を参照)。蓄積を最初に定義したのち、マルクスはまず、個々の資本家の立場から剰余価値の再転化を検討した。叙述がより明確になり、拡大再生産の本質がより正確に際だてられた。

フランス語版からのこのより長い一節には、シスモンドゥ・ド・シスモンディの蓄積の分析に対する批判も新しく含まれることになった。シスモンディの著作はフランスで広がっていた。マルクスは、拡大再生産が資本主義にとって典型的であり、そしてそれによって単純再生産が変化し、「らせん状」(S.547)に変化するという認識を評価した(S.547)。しかしマルクスの観点からすると、シスモンディの間違ひは、彼が「収入の資本への転化」(p.547)のための物質的な諸条件を徹底的に究明していなかったということであった。ナッソー・ウィリアム・シーニョアの節欲理論の誤った見方はこのことに基づいており、この見方は、資本家は個人的な断念と節制によってのみ生産を拡張することができるとし、そのため結果を正当に受け取ったとするものであった。マルクスは、この仮定は確かに資本家の元の資本には当てはまるように見えるが、追加的な資本には当てはまらないと書いている。「剰余価値が発生する過程を我々はまったく正確に知っている。それは資本化された剰余価値である」(S.548)と。マルク

スは、ドイツ語第3版の変更された箇所、資本家が「資本主義生産様式の内在的な諸法則」によって「累進的蓄積のみによって」資本を拡大することを余儀なくされることを明確に強調した (S.556)。

マルクスは、ブルジョワ経済学 (アダム・アミス、デビッド・リカードウ、トーマス・ロバート・マルサス、ジョン・スチュアート・ミル) による「拡大された規模での再生産の誤った理解」(S.550) を特別な箇所で扱った。ドイツ語版第2版の自用本 (異文553. 9-13を参照) とまた『『資本論』第1巻の変更一覧表』(S.13) の両方で、彼は冒頭の文章を新しく定式化した。ドイツ語第3版ではブルジョア経済学者の関心事を言葉ではっきり表現するというのである。ブルジョア経済学にとって決定的に重要だったことは「資本蓄積を第一の市民的義務であると布告し、出費するよりも多くのものをもたらし追加的な生産的労働者を獲得するために収入のかかなりの部分を支出することをしないで、収入の全部を食い尽くしてしまうのでは、蓄積はできない、と倦むことなく説教すること」(S.553) であった。「商品の価格は労賃、利潤 (利子) および地代より」(S.555) 成るとするスミスのドグマに主に依拠したブルジョア的な再生産理論を扱うさいに、マルクスは、蓄積にかんするスミスの理解が「単なる生産的労働者による剰余生産物の消費」として後世のすべての経済学者によって繰り返されてきたとはっきりと説明した (S.554)。マルクスはすでに以前の版でこの状況に注意を喚起し、そしてそのさい第2部第3章への参照を指示していた。ドイツ語第3版で彼は、スミスが困難にさしかかったところで研究を中断した理由をわずかな文章で説明した。主たる問題はつぎのようなものであった。すべての個別資本の運動、年間生産物のすべての部分それゆえ「社会的富の流通」の運動 (S.555) を把握すること、これである。この課題はマルクスが第2部で解決した。

この時点でマルクスはフランス語版で大きなテキスト拡張を行った。重農主義者の巨大な功績を強調したのである。彼らは「経済表で初めて、年間生産物の流通が明らかになるように図示することを試みた (同上)。彼は重農主義者のその学問的業績を初めて正当に評価した。マルクスは、1877年3月7日のエンゲルス宛の書簡で、『反デューリング論』の執筆の手助けのための補足としてフランス語版からのこの一節を伝えた (MEGA I /27 S.1003 参照)。

第22章の最後の部分でマルクスは、剰余価値の資本と収入への分割から独立した資本蓄積率を決定する諸要因を分析した。これと関連して、彼は蓄積率に対する労賃の影響に論及した。労賃を引き下げることができたならば、労働者の必要とする消費元本は資本の蓄積元本に変化する (S.563参照)。追加的な覚え書きを取り上げることによってマルクスは明快に言い表した。もはやイギリス資本の目的は大陸の賃金にあるのではない、中国の賃金なのであり植民地の抑圧された諸国の賃金を支払うことに目的があるのだと。つまりその賃金水準を母国に逆に適用することを目的としているのだと (S.564 参照)。「世界市場での競争」がますます増大することで、さまざまな労働生産力にもとづく著しい賃金格差が現れてきたのである。それゆえマルクスはドイツ語第3版で、剰余価値の生産を大きくするための重要な手段として賃金格差が利用される傾向があることを示唆したのである。

第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」の中間部分では、資本主義における労働者階級の状態について詳細な分析が行われている。ドイツ語第3版では新しく取り上げられたこの章の序論では次のことを研究対象とするとのことである。つまり資本の増加がいかに「労働者階級の運命」(S.574) に影響を及ぼすかということである。この場合もっとも重要な要素は資本の構成であり、蓄積の経過にともなったその変化である。価値構成と技術的構成との違いは、ドイツ語第2版ではただほのめかされただけであった。ドイツ語第3版でマルクスはフランス語版にもとづいて、量的および質的側面の弁証法的統一としての「資本の有機的構成」という経済



の状態を考察した。彼は、価値構成が技術的構成によって規定され技術的構成の変化を反映している限りで、それを有機的構成と名付けた。同時にマルクスは一国の社会的資本の構成としての有機的構成は、蓄積過程をさらに考察するさいには考慮されるべきだと指摘した。資本主義的発展の程度は、資本の有機的構成によって表現される。テキストの変更によって、この重要な経済学的なカテゴリーはさらに発展することになった。

第23章の最初の部分で、マルクスは、資本の構成が一定のまま蓄積が進行した場合、労働力への需要が増大しそれによって賃金上昇が引き起こされ得ることを示した。ドイツ語第2版から第3版へのテキスト変更では、この考えをさらに明確に定式化することが重要であるとマルクスは考えた。「毎年、前年よりも多くの労働者が就業させられるのであるから、遅かれ早かれ、蓄積の欲求が労働の普通の供給を超えて増大しはじめる時点、したがって賃金上昇が起こる時点が到来せざるをえない」(S.575/576)。文章のこの変更によって、一定条件のもとで、つまり蓄積の進行が破壊されない場合、賃金が増加する可能性が容認される。しかし蓄積が衰えるや否や、資本主義的生産過程のメカニズムは次のような変化を引き起こす。「労働価格は、ふたたび資本の価値増殖欲求に照応する水準にまで低下するのであって、この水準が、いまや賃金増加の始まるまえに標準なものとなされていた水準よりも、以下であろうと以上であろうと、または等しかろうと論外である」(S.583)。このことによってマルクスが明らかにしたことは、蓄積の進展は可変資本の相対的減少と関連しているということである。フランス語版に対応して、マルクスはドイツ語第3版ではさらなる結論を出した(異文538.38および584. 1-21参照)。労働運動内部では、資本、蓄積および賃金率が相互に依存しているのではないかという問題意識が、フェルディナント・ラサールの「賃金鉄則」を通じて一定の役割を演じていたのである。マルクスは直接ラサールを取り上げはしなかったが、次のことを明らかにした。資本内部で転化する不払労働、および追加資本の運動のために必要な追加的労働によってこの関係は明らかになるということである。拡大再生産が行われなければならないため、賃金率は資本主義システムによって限界を画されているのである。拡大再生産は資本の蓄積に依存した現象なのである。

第23章の第二の部分は「変更一覧表」に従ってフランス語版からまるまる移し替えられるとのものであった。(S.15 参照)。ただしエンゲルスはこれについて「導入部分と挿入部分」(S.31)だけを認めた。導入部分の変更されねばならなかった。なぜなら資本の有機的構成の定義(異文585. 4-18参照)は章全体の結末部分になっていたからである。

マルクスはこの部分で、蓄積の進展にともなう、不変資本の増加のために、可変資本にたいする不変資本の割合が変化することを指摘した。可変資本が相対的に減少する場合であってもその絶対的な量は大きくなり得るし、また、なるはずであると彼は説明した。資本主義における蓄積の進展の結果、可変資本の絶対量は大きくなり、そのことによって労働者階級も量的に増大する。技術進歩と労働生産力の増大によって資本の有機的構成が高度化するという法則性を彼は強調した。

ドイツ語初版と第2版においてマルクスは、資本の集積と集中の経過の内容を規定した。それにもかかわらず彼は、両方の過程のために集積の概念を用いた。そのことによって個別諸資本の増大(S.588参照)も「分散した個別諸資本の吸引」(異文589.16-17参照)も明らかになる。この両方の過程を概念的によりはっきりと区別するためにマルクスはフランス語版で「集中」という用語を導入していた。そのことによって政治経済学のカテゴリー体系の重要な拡大が行われ、これは対応する諸概念の使用を通じてドイツ語第3版に反映された。

第23章の最後の部分では、アイルランドに関する部分で、フランス語版のいくつかの節が追



加的に取り入れられた。このとき主として重要とされたものは、「アイルランドにおける農業労働者の賃金にかんする救貧法監察官報告書、ダブリン、1870年」(S.661-664参照)からの素材的資料である。すでにマルクスは1870年の4月、これを研究していた。彼は1870年4月14日にエンゲルスに宛ててこう書いている。「救貧法監察官報告書はおもしろい。・・・だが、全体として、僕がアイルランドに関する節のなかで述べたことが論証される。すなわち賃金の上昇が生活手段価格の騰貴に追いつけないということ、そして、収穫期などを除けば、労働者の相対的な過剰が、移民にもかかわらず、まさしく現出している、ということがそれだ。」さらに彼はアイルランド問題に継続的に取り組んでいたので、エンゲルスに詳細な情報を送るよう要請している。エンゲルスは1870年4月15日にマルクスに回答している。マルクスはしかし時間的な理由からその言明をもはや第2版に取り入れることはできなくなったため、それが表われるのはフランス語版に至ってからであった。

救貧法監察官の報告へマルクスはコメントしているが、その中で、1846年以前の時代と比べて農業労働者および零細小作人の状態は大幅に悪化していると指摘している。彼はこのことを、農業革命とりわけ「耕地の牧場化」、「機械の使用」および「きびしさこのうえない労働節約」と関連づけた(S.663)。ひとつの影響は、資本主義的再生産の基本的条件としての相対的過剰人口の発生であった。マルクスはアイルランドとイギリスを比較して、労働力の遊離の過程はたとえ違った形をとろうとも、両方の国で行われることを明らかにした。このことによって、資本主義的蓄積の一般的法則のような経済的法則性は、それぞれの国民的特徴に応じて貫徹するということが同時に指摘された。

第24章「いわゆる本源的蓄積」は、資本主義的生産関係とその歴史的発展の根拠の短い要約をもって始まっている。ドイツ語第3版でマルクスは、労働者と産業資本家の創生についての彼の叙述を豊かなものとした(異文669, 4-32参照)。彼は強調する。「資本主義社会の経済構造は封建社会の経済構造から生まれてきた。後者の解体が前者の諸要素を遊離させたのである」(S.669)。これによって、この章で封建的社会構成体から資本主義的社会構成体への発展を取り扱い、それに影響を与えた個々の諸要素を分析しうるための出発点が提供された。この部分における諸変更は、「賃労働者と資本家を生み出す」(同上)かの発展過程の叙述を完成させることに向けられている。

本源的蓄積の歴史は、農民からの土地の収奪を出発点とする。この過程をわかりやすく説明するためにドイツ語第3版では例解が拡張され補足されている。それらの例は、一スコットランド高地の例にみるごとく(異文681-22)一農耕民がいかなる手段と方法で土地から追放されていったかをありありと示している。

ドイツ語第3版ではマルクスは国内市場の発展についての節を拡張している。小農が賃労働者へと転化すること、そして彼らの生活手段・生産手段が資本の物的要素へ転化することは、同時に国内市場を創り出すということを彼は示した。農村家内工業の全滅によってのみ、一国の市場は資本主義的生産様式の強固な基盤となるような規模に達する(S.669参照)。

産業資本家の創出を分析するさい、マルクスの指示にしたがって、とりわけ本源的蓄積における租税の役割についての詳細なスケッチが、フランス語版からドイツ語第3版へ取り入れられた(異文704.40-707.15参照)。マルクスは最初に、産業資本家の創生が国債制度を通じて資本の富と密接に結びついていることに立ち入った。彼は、「公債」が「本源的蓄積のもっとも強力な槓桿」(S.705)となることを根拠づけた。これとの関連で、マルクスは債務をブルジョア国家の本質的メルクマールとして特徴づけた。マルクスはこの部分で、商業資本、銀行資本といった資本の転化諸形態あるいは債務の役割を研究してはしなかったが、ここで初めてそれ

らの創生が叙述に組み込まれた。彼はそのときおそらく第3部の1863-65年草稿の仕上げに手をつけていたのだ。マルクスはそのなかで、商人資本の歴史や利子生み資本の資本主義以前の状態についての諸章で、それらの本質の解説と関連して、これら資本の諸形態の創世記を詳しく説明していたのだ (MEGA II/ 4.2 参照)。マルクスは第3部をまたずに、国債の説明を機会として、それが株式会社、銀行制度および国際的信用システムおよび保護主義と結びついていることを指摘した。特に一国の近代的租税制度は国債制度の重要な補完物であった。国家債務は増税を必要とし生活必需品の騰貴をもたらす。これはなんら「偶発時ではなくむしろ原則」(S.706)である。「重税は賃労働者の状態に対して破壊的な影響をもたらすばかりでなく、農民や手工業者、要するに下層中産階級のすべての構成部分の暴力的収奪」をももたらす (S.707)。

マルクスは資本主義的蓄積にかんする詳述を完成させた。彼は資本主義的蓄積にかんする詳述を完成させた。彼は、資本主義的生産の諸法則が、労働過程の協同的形態の発展、科学的意識的な技術的应用、土地の計画的・共同的利用、共同的にのみ使用されうる労働手段への労働手段の転化、そして生産手段の効率的な使用に貢献するということから出発した。ドイツ語第3版で、マルクスは「世界市場の網のなかへのすべての国民の編入、したがってまた資本主義体制の国民的性格 (S.712) が、そのことと結びついていること」を補足した。マルクスは、資本主義の国際化が資本の拡大の結果であることを明らかにした。

第25章でマルクスは、「近代植民理論」のいくつかの問題に取り組んだ。ドイツ語第2版で彼は、ヨーロッパからアメリカ合衆国への移民の波にかんして詳述することと関連して、次のように指摘した。「賃金の落ちこみや賃労働者の従属がまだまだヨーロッパの標準的水準にまで落ち込んでいないとはいえ」アメリカの東部諸州では資本主義的生産がさらに発展している、と。ドイツ語第3版へはフランス語版から、アメリカ合衆国、「大共和国」における資本主義的生産は「巨人の歩み」で前進しているという認識が取り入れられた (S.721)。そしてマルクスはさらに断言する。南北戦争後のアメリカ合衆国の発展は、資本の集中の増加と結びついていたと。この発展は、アメリカへの移住者が母国と同じ生産関係を見出すことに導くだろう。『資本論』第1巻ドイツ語第3版におけるテキストの発展は、一すでに述べたように一すべての篇における個々の命題や概念を明確にすることや内容的に豊かにすることによって、そして、なかなづく資本の蓄積の篇における規定的・理論的な命題をさらに発展させることによって、特徴づけられる。同時にいくつかのブルジョア的・小ブルジョア的な諸見解に対する対決が深められ、新しい経験的な資料が取り上げられた。そのことによって、ドイツ語第3版では、資本主義的生産過程の科学的な叙述が質的に高い水準に達し、労働運動のなかで、マルクス主義の、特にマルクス経済学理論の決定的な達成と勝利のための貢献がなしとげられたのである。

『資本論』第1巻の発刊後、マルクスに対して幾度も、彼の経済理論の平易なダイジェスト版を出すよう要請があった。マルクスはそうした要請に前向きな態度であったが、時間的な制約からすぐには実行することができなかった。それにもかかわらず、彼とエンゲルスは社会民主主義の指導的な代表者たちに『資本論』をもたらし、ブルジョア経済学者たちの沈黙の壁を打ち破るいかなる機会も逃さなかった (MEGA II/ 6 S.14-16参照)。

この仕事に専念した最初の一人はヨハン・モストで、彼は1873年に『資本論』第1巻初版を研究したのち、『資本と労働』というタイトルでダイジェスト版を発行した。この著作は、マルクス経済学を理解させること、そして労働運動内部のラサールの見解を克服することに役立った。その著作が大いに普及したことで、ヴィルヘルム・リープクネヒトとユリウス・

ファールタイヒは第2版を用意するためにパンフレットを改訂するよう、マルクスに依頼することとなった。

マルクスは彼の主要著作をパンフレットの形で大衆化するすべての計画を非常に注意深く見守り、その執筆者の願いに賛成していたが、しかし場合によっては『資本論』の最も重要で理論的な根本内容を叙述することに対しては批判的に述べることもあった（1877年1月23日付ガブリエル・ドヴィル宛マルクス書簡および1881年2月22日付カルロ・カフィエロ宛マルクス書簡を参照のこと）。マルクスがモストのパンフレットの改訂に同意したとき、それが『資本論』を大衆化するためのひとつの良い基盤をすでにそなえていると考えていた。マルクスはそこに、ゴータ綱領に含まれたラサールの謬見を論駁し、合体した社会民主主義のなかで『資本論』を宣伝する可能性をも見出したのだった。特に彼は、のちに定式化したように、要約的な概説というものは、その叙述の学問的形式が過度にペダンティックになってはいけなかったと考えていた（1879年7月29日付カルロ・カフィエロ宛マルクス書簡（手稿））。モストのパンフレットの初版とマルクスが手を加えた第2版とを比べると、マルクスが『資本論』の論述の意味の内容的諸変更をどの程度まで計画していたかが分かる。そのパンフレットの内部構成は基本的に『資本論』の区分に従っていた。章の区分にあたってモストは、彼にとって「よりよく理解しやすいと思われる」といった基準で行っていた。抜粋の主な特徴は、『資本論』の章句が詳細に引用されているか、もしくは要約されているということであった。モストは簡潔で扇動的な経済理論の叙述のなかでは、「労働する諸階級の状態をよく詳しく表す」（同上）多くのデータを引き合いに出すことはできなかった。モストはマルクスのブルジョア経済理論の批判的分析もまた取り上げることはできなかった。マルクスはこのモストの独自の叙述やレイアウトを不快に思うことはなく、その著作の表面的な区分けは変更することはなかった。モストは『資本論』のいくつかの章句の学問的内容を理解していなかったため、マルクスはそのパンフレットの第2版のために『資本論』の章句にしたがってそれらを定式化する労を引き受けた。

マルクスによるテキスト変更は、主に商品価値の本質、剰余価値形成および労賃のあいだの厳密な関連に関するものであった。特に生活の確保という労働者の関心をひきつけながら、マルクスは搾取の本質を暴露してみせた。そのさいマルクスは、価値と交換価値、労働と労働力、そして労働力の価値・価格といった経済学的カテゴリーの正確な使用の仕方に重点を置いた。マルクスは特に「価値、貨幣、労賃について」という部分（1876年6月14日付フリードリヒ・アーノルド・ゾルゲ宛マルクス書簡）を新しく書いた。

経済理論を理解するためには「商品と貨幣」という部分の叙述は決定的に重要である。価値理論つまり商品価値と価値法則の解明は、剰余価値理論のための、資本・賃労働関係の分析のための基礎をなしている。そこでマルクスは価値実体と価値量を定義するにあたって『資本論』第1巻の諸定式を採用した。ただし彼が執筆にあたって大切であるとしたことは、抽象的労働や労働の二重性といったカテゴリーや概念を使うことなく、社会的平均労働が価値実体を形成し、労働量が価値量を規定することを示すことであった。

モストの著作の第2版の最初の部分には数多くのテキスト章句があるが、それらはマルクスがいかに具体的にわかりやすく価値規定を説明したかを明確に物語っている。したがって彼は価値の源泉としての労働の基礎固めをつぎのように行った。「未発展な社会状態では、同じ人間が、まったく違った種類のいろいろな労働を行います。あるときは畑を耕し、あるときは機を織り、あるときは鉄を鍛え、あるときは大工仕事を行う、などなどです」（S.739）。マルクスがこれによって示したことは、社会進歩をつうじて分業がいかに発展してきたということである。そして次のように書いている。「・・・資本主義社会が発展できるのは、生産がすでに、



たがいと並んで自立して営まれる有用な労働種類からなる一つの多岐的システムにまで・・・発展したときだけです」。この命題によって商品価値の規定は平均労働によってわかりやすく説明された。

価値形態の叙述は、モスト著『資本と労働』の第2版ではわずかな節で新しく表現されることになった。マルクスはここで価値形態の4つの発展段階をより簡明なやりかたで要約している。なるほど『資本論』の専門用語はたしかに使ってはいない。彼は、質的に異なった交換形態としての価値形態の歴史的生成を考察している。価値と使用価値とのあいだの矛盾の発展は、歴史的な発展のなかで生産物交換の商品交換への転換を通じて成し遂げられるのである。マルクスは断言する。「この価値形態は徐々に、生産物交換から、そして生産物交換とともに発展するのです」(S.741)。

生産物交換はもっぱら、その固有の消費のためだけに規定された諸対象の製造を前提している。それゆえ交換は偶然的な性格をもっている。たとえば「毛皮が塩と交換」されるように(同上)。外見的にはこれら諸関係は、簡単な、または偶然的な価値形態に相応する。しかしマルクスはこの概念を意識的に採用しなかった。交換のその次の形態に発展するのは次の瞬間である。ある種族、マルクスの言葉でいえば「シベリアの狩猟種族」が、他の種族に生産物を差し出し、その代わりに別の違う生産物を得るその時点である。そしてマルクスはこの次の形態への移行を「異郷の商品所持者の側からの」(同上)取引をみることを通じておこなう。長い歴史的過程を説明することはしない。他のすべての生産物に適用される一般的等価物は「共通の価値表現」によって決定されるのである。「言い換えれば、毛皮は生産物交換のこの範囲のなかで貨幣となるのです」(同上)。『資本論』第1巻でマルクスは、価値形態の分析でなく商品の交換過程を取り扱うさい、生産物交換の歴史について次のように述べている。「二つの異なった使用対象がまだ交換されず、未開人のあいだにしばしば見うけられるように、混沌としたひとかたまりがある第三の等価物として提供される限りでは、直接的な生産物交換そのものはやっとその入り口に立ったばかりである」(S.114)。さらにマルクスは、生産物交換が商品交換に転化する地点、つまり「共同体の終わるところで、諸共同体が他の諸共同体または他の諸共同体の諸成員と接触する点」を規定する。そして歴史的にみれば、価値形態は一般的等価形態、貨幣という表現に発展したのである(S.742参照)。

モストの著作の第2版における生産物交換の発展を研究することによって、マルクスが『資本論』第1巻の価値形態の部分で論じたような多様な諸規定が理解されたわけではなかった。同時に叙述方法において歴史的モメントが優先されたことも明らかである。

「労賃」という部分は、マルクスが1876年6月14日付ゾルゲ宛書簡で述べたように、ほぼまるまる書き加えられたところである。彼はその部分を労賃の次のような諸規定を通じて始めている。「労働者の目には、自分がこの支払いで受け取る貨幣は、ほかのすべての商品と同じく、提供される商品の価値または価格を、したがってまた労働の価値または価格を埋め合わせるもののように見えます。だからこそ、この貨幣は労賃と呼ばれるのです。」(S.764)マルクスはことに、労賃が、労働ではなく労働力商品の価値の現象形態として理解されなくてはならないと指摘した。彼はモストの説明の代わりに、『資本論』第1巻第17章「労働力の価値または価格の労賃への転化」に含まれている理論的命題を置いた(異文764.4-765.15参照)。彼は、現象形態とその隠された背景との違いがそこに存在すると解説した。その現象形態は「ふつうの思考形態」として再生産されるが、その本質は科学によってはじめて発見されなくてはならない(S.512参照)。そこで労賃の本質の説明が中心に置かれたのである。労賃形態が労働者と資本家とのあいだの関係を「覆い隠す」(S.764)ことをマルクスはこのことを通じての



み明らかにすることができた。このことを確認することによって彼は、労賃の本質をはるかに良く理解するための貢献をなしたのである。

『資本論』の認識に対応する大衆的な経済理論の説明があったが、それに向けた部分的改訂とは別に、マルクスはより広い一節でいくつかの重要なテキスト変更を行った。それらは特にラサールの経済理論へのモストの取り組みと、それに結びついた社会主義へのイメージとその諸問題と関連していた。その諸問題とは、労働運動内部でとりわけ集中的に討議されていたものである。

労働運動やその代表者たちは長きにわたり、ラサールの提唱した「労働収益非縮小論」という公平とされる分配理論に対して明瞭な態度をとっていなかった。マルクスは「必要労働時間」と「剰余労働時間」の定義づけに関連して標準労働日を求める問題を取り上げ、そしてその問題を、資本主義的生産の発展（異文751.38）と「労働日の短縮をめぐる」（S.750）労働者階級の闘争との密接な関連のもとで表してみせた。モストによって『資本論』から挙げられた例は、労働者は「なによりもまず、ひとつの標準労働日を獲得しなければならない」（S.752）というものであった。それゆえモストの本ではこの展望はとりわけ「より高度な社会形態」に道をひらくものである。マルクスはこの文章を書き替え（異文752.11-18）そして次のように強調した。「社会主義社会形態は・・・その労働日も、必要生活手段の生産に不可欠な時間だけに制限するわけにはゆかない」と。しかしその違いは、「ここでは生産者たちは、ただ自分のためだけに」労働し、そして「社会的労働の生産力がこれまで考えられることもなかったような飛躍を遂げる」（S.752）という点にある。

この見解はおそらく、数週間まえに書かれた「ドイツ労働者党綱領評注」にもとづいている。そこではマルクスはラサールの理論と対決し、そして次のように定めた。個々の生産者は「共同の元本のための彼の労働分を控除した上で」、「社会的」労働日の彼の持ち分を引き出す、と（MEGA I /25.S.13/14参照）。そうしてマルクスはその綱領批判で次のように強調している。共産主義社会のより高度な段階では、社会はその旗の上にこう書くことができる、と。「各人はその能力におうじて、各人にはその必要におうじて！」（MEGA I /25.S.15）マルクスは『評注』でこの問題に詳しく立ち入りつつ、そのパンフレットの第二版で核心部分を要約した。モストはマルクスの資本主義的人口法則に基づいて、ラサールの「賃金鉄則」と対決した。マルクスにはこれに対するモストの言及を抹消する理由はなく、単に事実にもとづく内容を減らしたに過ぎなかった（異文772.34-36）。

『資本と労働』という著作は、資本主義的蓄積の歴史的法則にかんする言明で締めくくられている。マルクスはこれを部分的に変更した。「資本主義的私的所有の終わりを告げる鐘が鳴ります。他人の所有の収奪者が収奪されます」（異文783. 26-27）。それを出発点として、彼は社会主義のいくつかの根本原理を宣言した。これには次のものが含まれる。「人民は政治権力を完全に掌握していなければならない」と（S.784）。社会主義は高度の「協同組合的」（モスト：社会的）生産様式であると。それゆえ「人民が支配されている状態に代わって、人民の自治（モスト：直接的立法）が現れるのではなくてはなりません」（同上）。これらの変更をおこなうさい、マルクスは『評注』の諸定式を受け継いだ。そこでは彼は「生産手段の共有を土台とする共同体に立脚した協同組合的社会としての社会主義」を語っている。

モストの著書『資本と労働』はマルクス、エンゲルスの『共産党宣言』での呼びかけで締めくくられている。「万国のプロレタリア、団結せよ！」